

阿弥陀さまをおがむ子どもを育てる

お釈迦さまや親鸞さまに親しみを持つ

園生活の中で、みんなからお祝いしてもらい毎月のお誕生会はとても楽しいひと時です。自分の誕生会ともなれば、何日も前からわくわくとときどきしながら待っています。お誕生日は子どもたちにとってかけがえのない、1年で一番特別な日です。

今から2500年前の4月8日、インドの北にあるヒマラヤの山々の麓、現在のネパールのルンビニーの花園で、お釈迦さまはお生まれになりました。その時、天が感動して甘露の雨を降らせたと伝えられています。園でもお釈迦さまのお誕生日には、色とりどりの花々で飾った花御堂の中の小さなお釈迦さまに甘茶をかけてみんなで祝い（灌仏会）をします。

また今から846年前の5月21日、京都の日野の里で、親鸞さまがお生まれになりました。親鸞さまは、まだ幼いうちにご両親とお別れになり、わずか9才で出家されると、90年にわたるご生涯をかけて浄土真宗のみ教えをあきらかにされました。子どもたちには「お釈迦さまのことや、阿弥陀さまのことを、私たちに教えてくださった大切な先生なのですよ」とお話します。親鸞さまのお誕生日を「降誕会」といいます。私たちの園では「しんらんさまバースデー」と名付けて、年長組さんが企画、主催するお誕生会を行っています。

5月に入ると、どのようにお祝いするか、年長さんたちの話し合いが始まります。プレゼント作りと称して、園庭の「しんらんさま」の像にかける花輪や首飾りを作ったり、絵やお手紙を書いたりします。みんなで歌や仏教讃歌を決め、司会進行も子どもたち自身でつとめます。しんらんさまクイズ大会では、まだ園生活に慣れない新入園の年少組さんたちも大いに盛りあげられます。おいしいケーキもいただきます。みんなで協同して1つのことを成し遂げたという達成感を味わうと同時に、しんらんさまバースデーの楽しかった思い出が子どもたちの心の中に育まれ、これからの1年間を支える自信となっているようです。

親鸞さまについて理解するのが難しい子どもたちでも、園庭の真ん中にお立ちになっていたらしんらんご幼少期の親鸞さまの銅像のことは、よく知っています。登園するとまずは親鸞さまに朝のごあいさつをするのが日課です。髪を束ね、小さな両手でしっかりと合掌なさっている親鸞さまの姿に親しみを感じるのでしょう。花を摘んできてお供えする子や、クローパーの首かざりをかける子もいます。ささやかなその像を粗末に扱う子は1人もいません。そればかりか、クラスで飼っていたカタツムリや亀の死に直面すると、きまって「しんらんさまの下に埋めよう」と、誰からともなく声があがります。ですから、親鸞さまの銅像の周りはひそかに掘り返されては、小さな生き物たちのお墓になっていくのです。

無垢な幼心に、いつからこのような宗教的な感性がそなわるのか、考えてみれば不思議なことです。毎年開催している6年生の会では、思春期を迎えた卒園児たちも阿弥陀さまや親鸞さまに手を合わせ、素直におつとめをする姿が見られます。幼児期に宗教的情操の中に生活することの意義は、幼いうちにはまだ見えにくいかもしれませんが、それが、未知の海を航海する子どもたちの手に羅針盤を手渡すようなことだったと知るのは、ずっと後になってからのことなのでしょう。

まことの保育の願い

教育原理委員会 宮武紗和子